

伊藤若冲の著色画における漆の使用をめぐる ― 徽宗憧憬の可能性 ―

おおた り さ こ
太田 梨紗子 (神戸大学)

発表要旨

10
時
40
分
―
11
時
20
分

松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ー
ル

18世紀京都画壇で活躍した伊藤若冲(1716-1800)をめぐるは、近年あらためて注目を浴び、様々な視点から研究が進んではいるが、その作画技法についての考察は等閑に付されている。特に「動植綵絵」の修理に際して科学調査で確認された裏彩色などの技法や色料についてはその報告以後、同時代の絵画や文献資料との比較検証がほとんど行われていない。

本発表の目的は、技法研究の試みの一つとして、若冲の著色画に確認される鳥獣の目への漆の使用が何故選択されたのかを明らかにすることである。そのため、この技法が若冲の時代にどのような意味をもっていたのかを、当時の技法を記録していると考えられる同時代や近代以降の画論書、画法書を対象に検討した。その結果、林守篤『画筌』や佐竹曙山『画法綱領』、駒井龍仙草案・幸野樗嶺訂正『絵具使用法』において漆の使用は「卑俗の法」として否定的に捉えられていたことが明らかとなった。その一方、狩野永良(1741-1771)の『画伝集』『秘伝画法書』には北宋の皇帝・徽宗が使用した高貴な技法として紹介されており、まったく異なる価値観が同時代に併存していた。管見の限りでは、後者の認識は同時代の画家による記述としては永良以外には見当たらず、中国の画史においては『画継』『図絵宝鑑』の徽宗の項に記されるのみである。さらに、永良の著作には他の文献には見られない徽宗の鶏図の逸話が挿入されている。本発表では、これらを踏まえた上で、若冲が京狩野、おそらく永良を師としていた可能性を両者の作品比較も含めて検討する。

また、若冲の「鸚鵡図」が「架鷹図」の変奏であるという先行研究の指摘を受け、徽宗筆の伝承を持つ「鷹図」の白鷹が徽宗自身のイメージに結び付くことを明らかにした上で、若冲が徽宗への憧憬を有していたのではないかという仮説を唱える。現在、若冲の描く白鸚鵡の作例は肉筆で5点、さらに花鳥版画でも確認されている。そのうち肉筆作品の図様の類例は現状で見出されておらず、若冲独自のものと見なし得る。また、「鸚鵡図」については、特定の鸚鵡を描いたもの、もしくは何らかの人物の見立てである可能性が指摘されてきた。これらの研究と、近世において「鷹図」が徽宗を象徴するものであったことを、狩野派における徽宗受容や文献資料から確認し、若冲が徽宗の技法と認識されていた漆の使用を踏襲していることから、若冲が「鸚鵡図」へ徽宗とともに、自らの姿も重ねていた可能性を提示する。

そして、若冲の徽宗憧憬の背景として、相国寺住持・梅莊顕常との交流を指摘する。禅僧の徽宗への愛好は五山文学に徽宗関連の詩があることなどからよく知られており、梅莊自身も『宣和画譜』を参考にしながら『若冲居士寿蔵碣銘』を記している。以上から、若冲の作品における鳥獣の目への漆の使用は梅莊顕常を通じて得た徽宗憧憬の表象であったことを本発表の結論とする。